



去る9月7日、1977～1988年に日本精神神経学会理事を務められた寺嶋正吾氏が逝去された(享年96)。若い頃、カナダに留学し、欧米の地域精神医学を学んだ同氏は、海外における精神障害者の人権をめぐる医療と社会の動向に詳しく、理事として「研究と人権問題委員会」(当時)を担当するとともに、世界精神医学会(World Psychiatric Association: WPA)の倫理委員を長年務めた。1970年代末、旧ソ連における精神医学の政治的濫用の告発に端を発したWPA内の論争をリアルタイムに報告したのは寺嶋氏であったし、ベルギーの小都市、ギールにおいて中世から続く精神障害者の地域ケアに関するアメリカ-ベルギー共同研究をわが国に紹介したのも同氏である<sup>4)</sup>。1984年、宇都宮病院事件をきっかけに国連人権小委員会において日本の精神医療が告発された時は、それに対する日本政府代表の答弁が事実とはかけ離れた不正確な英語表現であることを寺嶋氏は鋭く指摘した<sup>6)</sup>。わが国の精神医療改革が遅々として進まず、私たちが国際的にも孤立している状況を誰よりも憂慮していたに違いない。

寺嶋氏の訃報を聞く数ヵ月前、イタリア北部の都市、トリエステの精神保健システムが危機に瀕しているという気になるニュースが世界を駆け巡った。同市は、後にイタリア全土に広がる精神医療改革をBasaglia, F.が始めた拠点であり、精神科病院を廃する代わりに地域精神保健センターを中心とした地域の複合的な支援ネットワークは、トリエステ・モデルと呼ばれ、今日最も先進的な地域精神保健事業として知られている。そのトリエステ・モデルが危ないと、元WHO精神保健薬物乱用部門ディレクター、Saraceno, B.らが国際世論に訴えた<sup>5)</sup>。というのも、トリエステのバーコラ行政区の地域精神保健福祉センターの新しい所長にBasagliaの後継者ではないサルディーニャ島出身のTrincas, P.が任命されたことに、地元のBasaglia学派の精神科医たちが一斉に反発し、左派系メディアがそれを中道右派寄りの地方政府による不当な人事として報道した

のである<sup>2)</sup>。Saracenoらの声明に直ちに共鳴したのは、アメリカのFrances, A.であり、7月15日公開のオンライン版Lancet Psychiatry上で、民営化の推進を企む右派政権がトリエステ・モデルを解体しようとしており、これは1980年代にアメリカの共和党政権が地域精神医療を破壊したことを想起させると強い懸念を表明した<sup>1)</sup>。一方、こうした異議の申立てに対して、トリエステの保健担当行政官は、「Basaglia学派であることは人事選考の要件ではない」と反論し、またサルディーニャの医師会長もメディアの報道は「よそ者」を正当に評価しようとしないと批判している<sup>3)</sup>。結局、決定した人事は覆らず、8月1日よりTrincasはバーコラ地域精神保健福祉センターの所長に着任した。

一連の騒ぎを見ていると、世界に冠たるトリエステ・モデルもどうやらイタリア精神医学界内部の派閥対立に加えて、時の政治や経済の動向などの微妙なバランスのうえに成り立っているように思える。それ以上に、関係者の精神医療と政治的イデオロギーとの距離感が私たちとはずいぶん違うようだ。昨年のアメリカ大統領選挙をめぐる精神科医の政治的発言にも同様の印象をもったが、これは単に政治制度の違いによるものなのかどうか。今こそ寺嶋氏に訊ねてみたかったと思う。

黒木俊秀

- 1) Frances, A.: Save Trieste's mental health system. Lancet Psychiatry, 8 (9); 744-746, 2021
- 2) Il Piccolo, 8 June 2021
- 3) Psychiatry Online Italy, 25 June 2021
- 4) Roosens, E 著, 寺嶋正吾訳: ギールの街の人々. 精神医療委員会, 東京, 1981
- 5) International Mental Health Collaborating Network, 27 May 2021
- 6) 寺嶋正吾: 国連人権小委員会における日本の精神医療についての国際人権連盟の告発と日本政府代表の答弁. 精神経誌, 86; 856-862, 1984